

氏 名	うす い とも こ 碓 井 智 子
学位(専攻分野)	博 士 (人間・環境学)
学 位 記 番 号	人 博 第 389 号
学位授与の日付	平 成 20 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研 究 科 ・ 専 攻	人 間 ・ 環 境 学 研 究 科 人 間 ・ 環 境 学 専 攻
学 位 論 文 題 目	Cognitive Time Model: With Special Reference to Temporal and Spatial Phenomena in Natural Language (認知時間モデル：自然言語における時間表現と空間表現を中心に)
論文調査委員	(主 査) 教 授 山 梨 正 明 教 授 大 木 充 准教授 河 崎 靖

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、認知言語学の枠組みに基づき、日常言語の時間表現のメカニズムの解明を試みた理論的・実証的研究である。全体は6章から成る。

第1章では、これまでの時間表現の研究を批判的に検討し、認知言語学の枠組みに基づく本論文の研究に関する基本的な分析の方向が示される。特に、本章では、レイコフ-ジョンソンのメタファー理論の研究を起点とする伝統的な時間表現の研究を批判的に検討し、比喩的マッピング・モデル、拡張ネットワークモデル、等の認知言語学の分析に基づく時間表現の研究に関する新しい分析の方向が示される。

第2章では、空間認知と空間移動の認知プロセスの視点から、日常言語の時間のメタファー表現のメカニズムの解明を試みている。これまでの研究では、時間表現に関し、認知主体が時間を動く対象として把握する認知モードと、認知主体が時間との関係で移動する認知モードの存在が指摘されている。一般に、前者はMOVING TIME METAPHOR、後者はMOVING OBSERVER METAPHORと呼ばれている。本章では、これらのメタファーは、欧米諸語だけでなく、日本語、中国語、等の言語にも見られる基本的なメタファーであるという事実を広範な言語データに基づいて分析し、この二種類のメタファーの一般性を明らかにしている。また、従来の研究では、時間が動くものであると捉える際に生じる方向性に関しては、前・後軸の方向性に基づく言語事例が主な研究対象であったが、上・下軸の方向性に基づく言語事例も明らかにしている。

第3章では、時間のメタファー表現を体系的に分析する際の基本特性として、以下の6つの特性(DIRECTION, MOTION, SEQUENCE, DIMENSION, DURATION, QUANTITY)を提示し、これらの特性に基づいて時間のメタファー表現を体系的に分析している。特に本章では、これまでの時間の分析において欠けていた時間の見立ての多面性を考慮し、この多面性を反映する複合時間特性モデルを提案する。そして、複合時間特性モデルにおける一つ目のモデルとして、まず認知主体が背景化される時間のメタファー表現の存在を指摘する。例えば、“Time flies.” “Time flows by.”のような表現は多くの言語において観察されるが、この種の表現においては認知主体は背景化されており、認知主体は時間の流れを客観的に外から傍観する存在となっている。本章では、この時間モデルを、非主体的-客観時間のモデル(Model 1)として規定する。これに対し、主観性の非常に高い、認知主体の内面を反映させた時間表現も多く見られる(e.g. “Time drags when we are bored.”)。本章では、これを主体的時間モデル(Model 2)として規定する。Model 1とModel 2は時間の動きに注目したモデルであるが、時間の認知モードには、さらに時間の流れを背景化した言語表現も観察される。例えば、“February is after January.”のような表現においては、時間の動きは背景化されており、時間軸上の静的な位置関係が重要な役割をになう。本章では、この種の時間表現は、時間指示の相対モデル(Model 3)によって規定される。次に時間軸上の参照点が現在に固定される時間認知をModel 4として位置づける(e.g. “Tomorrow I’ll go there.”)。さらに本章では、Moving Time MetaphorをModel 5(e.g. “Christmas is coming up on us.”)、Moving Observer MetaphorをModel 6と位

置づける (e.g. “We’re coming up on Christmas.”)。本章では、時間認知において、以上の6つのメタファーモデルが複合的に関連して、日常言語の多様な時間表現を派生するメカニズムを明らかにしている。

第4章では、空間と時間のドメインの上位概念として一般スキーマ (Generic Schema) の存在とそのスキーマ内の属性と構造を分析している。これまでのレイコフ・ジョンソンのメタファー理論を起点とする時間表現の分析では、1次元的で一方向性を持つ時間のメタファー表現だけが分析の対象となっている。これに対し、本章では、2次元形容詞、3次元形容詞に関わる述語が時間のメタファー表現として使用される事実注目し、日本語、中国語、英語、フランス語、等におけるこの種の事例を体系的に分析している。本章では、これらの次元形容詞に基づく時間表現は、一方向性と移動の見立てに基づく1次元的な時間のメタファー表現の制約に反し、時間の量の見立て、時間の容器性を見立て、等に関する認知モードの制約に関わっている事実を明らかにしている。

第5章では、特定の言語、文化に見られる特殊な時間のメタファー表現を考察している。「時は金なり」のように時間を貴重な資源に見立てるメタファーは、英語のみならず多くの言語において観察されるメタファーの一つであるが、言語によっては、この種の一般的なメタファーとは異なる特殊な時間のメタファーが存在している。例えば、時間の経過により心の傷が癒えることを背景として、時間を良薬に見立てるメタファーが存在する。その他にも、時間の経過が記憶を無くしていくことから時間を破壊者であると見立てるメタファー、時間の経過が記憶を和らげていくことから時間を癒す存在であると見立てるメタファー、さらに特殊な例として、時間を家畜、等に見立てるメタファーも存在する。時間を家畜に見立てるメタファーは、一見したところ、時間の特性の何を表しているかが明確ではないが、家畜が重要視されている文化においては金のように貴重な資源であるため、この種のメタファーが存在するものと考えられる。本章では、言語類型的な観点から、異なる言語、文化の生活経験に根ざす多様なメタファーを体系的に分析し、日常言語の時間表現を可能とする見立てのモデルの多面性を明らかにしている。

第6章では、理論面・実証面の双方の観点からみた時間表現の記述と説明に関する本研究の意義と一般的な展望が論じられている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、日常言語の時間表現のメカニズムの解明を試みた理論的・実証的研究である。従来の時間表現に関する研究の大半は、言語主体とは独立した言語記号の自律性を前提とする意味分析が中心になっており、外部世界と言語主体の相互作用を反映する時間表現の意味拡張に関する体系的な研究はなされていない。本研究の独創的な点は、従来の研究で等閑視されていた時間表現の意味拡張と多義性の諸相を、認知言語学の枠組みに基づき、メタファー写像、イメージスキーマ形成、スキーマ変換、等の認知プロセスとの関連で体系的に分析している点にある。

これまでの時間表現の研究では、時間の一次元性、不可逆性に基づく時間表現の分析はなされているが、時間の多次元性に注目した研究は本格的にはなされていない。本研究の重要な貢献は、時間の多次元的な側面を示す言語事実を綿密に検討することにより、時間にかかわるメタファー表現の複合的構造を明らかにしている点にある。また、従来の時間表現の分析では、前・後軸の移動の方向性に関する言語現象が主な研究対象であったが、本研究では、新たに上・下軸の方向性、円環的な方向性に基づく時間表現の意味拡張のメカニズムを明らかにしている。時間概念の把握のメカニズムの解明は、人間の知のメカニズムの解明のための基礎的な研究として重要な意味をもつ。本研究で指摘されている日常言語における時間の一次元性、不可逆性、前・後、上・下、円環、等の方向性の解明は、人間の時間概念の把握と知のメカニズムの解明の実証的研究として重要な意味を持つ。

認知言語学の時間表現の研究の大半は、レイコフ・ジョンソンのメタファーの理論的枠組みに基づく研究に代表されるように、時間は空間の経験によって概念化されコード化されるという考えを前提としている。認知言語学の研究にとどまらず、これまでの言語学における時間表現の研究対象は、主に空間概念に根ざす時間のメタファー現象が中心となっている。しかし、日常言語には、空間用法を持たない時間表現（前後、上下、等の空間的な次元ではなく、例えば量の概念に基づく時間表現、大きさの概念に基づく時間表現、等）も広範に存在している。本研究では、空間用法を持つ時間表現と空間用法を持たない時間表現に関し、6つの時間概念の見立てのモデル（論文内容の要旨で指摘しているModel 1～Model 6）から構成

される複合時間特性モデルに基づく統一的な説明を試みている点に独創性が認められる。レイコフ-ジョンソンのメタファー理論の見立てのモデルは、以上の見立てのモデルのうち、Model 5 と Model 6 に関係する時間のメタファー現象の予測を可能とするが、本研究で規定している Model 1 ～ Model 4 にかかわる時間のメタファー現象も含むより包括的な言語現象の分析は行っていない。

これまでの先行研究においては、時間の比喩表現の存在とその種類を記述的に分析するにとどまり、多様な時間の複合的な比喩表現の生成を可能とする原子的メタファーの解明は試みられていない。時間のメタファー表現のかかなりの部分は複合的なメタファー表現であるため、メタファー概念の複合性の階層関係からみた場合、上位レベルに位置づけられるメタファーである。日常言語の時間表現の一部が、空間概念の見立てによる複合的な概念構造を構成している点は、これまでの認知言語学のメタファー研究においても指摘されている。これに対し、本研究では、複合的な時間のメタファー表現を構成する原子的メタファーの基本構造を明らかにすることにより、これまで時間表現の表層レベルにおける下位分類に留まっていた分析に対し、複合時間特性モデルの枠組みに基づき、体系的な説明を与えている。さらに、本研究の分析は、時間概念の基本構造を特徴づけている原子的メタファーが、どのように相互に作用しあって、表層レベルにおける複合的な時間表現を構成しているかを明らかにしている。

本研究は、次の点で、従来の理論言語学の研究を越える実証的な分析を試みている。第 1 に、共時的に観察されるデータを、これまでの先行研究でなされている作例や典型的な例文だけでなく、言語類型論的なデータを収集・分析し、より信頼性の高い結果を出している。第 2 に、得られた言語データをより明示的・体系的に分析するため、時間表現の多義性と意味拡張のプロセスを、認知言語学の枠組みにおけるプロトタイプ理論とイメージスキーマモデルに基づく認知図式により明示的に定式化している。第 3 に、分析の対象とされる時間表現の多義性と意味拡張の諸相を、語彙レベルの観点から分析するだけでなく、文法レベルと統語レベルの観点からも包括的に分析している。

本研究は、主に共時的な観点からみた時間表現の意味の拡張と多義性に関する研究であるが、以上の研究成果は、通時的（ないしは歴史的）な観点からみた意味変化の研究への基礎的研究としても注目される。さらに、本研究は、言葉の意味の獲得過程と言語の創造性の解明を図る言語習得と認知発達の関連分野の研究への基礎的な研究としても注目される。

本申請者が所属する環境情報認知論講座の目的の一つは、言語、知覚、思考、推論、等にかかわる人間の知のメカニズムの解明にあるが、本研究は、この目的に沿った基礎的研究として高く評価できると共に、今後の言語学と認知科学の関連分野への貢献がさらに期待される。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成20年1月23日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。